

東京市教育会主催「通俗講談会」の展開過程

山 本 恒 夫

はじめに

本稿は近代日本都市教化史研究の一環をなすもので、明治後半から大正にかけて東京で行なわれた通俗講談会の展開過程を分析したものである。本稿が近代日本都市教化史研究の中で占める位置を詳説することは煩瑣にすぎるので、いずれその全貌を明らかにする時まで譲ることとし、ここでは東京市教育会主催の通俗講談会をとりあげる理由を一、二述べるだけに止めておきたい。

近代日本の都市におけるさまざまな教化活動のうち、明治後半から大正にかけての社会教育（当時の公的な用語法は通俗教育であった）が行なったものは、その多くを通俗講談会に拠っていたということが出来る。ここでとりあげる東京市教育会主催の通俗講談会はいわばその代表的な例であった。図書館や博物館のような社会教育施設の設置を別とすれば、近代日本の公的社会教育が通俗教育と銘打った組織的教育活動を本格的に展開したのは、都市といわず農村においても、おそらく通俗講談会がその最初だったであろう。しかもそれが教化中心であったからには、近代日本の都市教化史研究が通俗教育に関する限り、そこに焦点をあてるのは当然だといわねばならない。明治期はまだマス・メディアがマス・メディアとしての機能を十分發揮しておらず、庶民層に幅広く浸透していたとはいいがたいから、講談会や演説会はきわめて有効な教化手段であり、われわれの想像以上に評価が高かった。わけても東京市教育会主催の通俗講談会は、全国各地で行なわれた類似の講談会のモデルとされていたのである。ここにこの通俗講談会をとりあげる第一の理由がある。

ところで、これがモデルであったということは、とりもなおさず政府の教化政策にすばやく反応していたからでもあったが、実はこの点が

第二の理由にかかわりをもっている。確かに、東京市教育会主催の通俗講演会は政府の教化政策をすばやく受け容れはしたが、そのことが直ちに教化政策と末端における教化活動の内容が完全に一致していたことを意味するものではない。そこには当然何らかのずれが生じていたにちがいない。われわれはそこに予想されるずれを解明しない限り、たとえ教化政策や教化活動の意味を問うても一面的な解答しか得られないように思われる。しかるに、従来の政治思想史研究や社会教育政策史研究は、国家レベルでの政策や高度に体系化された思想のみを取り扱う傾向があったが為に、ともすれば一面的になるきらいがあった。東京市教育会主催の通俗講演会を分析することは、政府の政策が地方のレベルまでおろされ、実際の教化活動として具現化するまでの間にどのような変容があったかを明らかにする重要な手がかりになるであろう。これがこの通俗講演会を取り上げた第二の理由である。しかし、この問題はどちらかといえば展開過程の分析より、その精神構造の解明にかかわる問題であり、本稿の範囲を越えることがらである。ただ、教化の精神構造を解明する作業は、展開過程の分析と同時にすすめてつづあるので、一応ここで指摘しておくことにした。

一、東京市教育会主催「通俗講演会」の成立事情

(一) 東京市教育会の設立と通俗講演会

はじめに、通俗講演会を主催した東京市教育会の設立の経緯について述べておきたい。東京市教育会が設立されたのは明治三十三年である。同年五月九日、皇太子（後の大正天皇）婚礼に際し、東京市に対し教育資金八万円の下賜があり、東京市はそれを永遠保存として利子を一部元金に繰り込みつつ教育事業奨励資金とすることにした。⁽²⁾ 時の東京市長は松田秀雄で、かれはこれを機に東京市の教育を推進する教育団体の設立をはかった。

「東京市長の職に在る松田秀雄君は、輝く恩賜の聖慮に感激し、東京市教育の発達を希望する点よりして、一の有力なる団体の成立を唱導し……」⁽³⁾ その結果出現したのが東京市教育会である。

この教育会設立にことのほか熱心だったのは、当時東京市議会議員の職にあり、同年一月に伊藤内閣が成立するや通信大臣となった自由党の星亨である。星亨のあるところ常に物質的醜聞がつきまとい、批難もたえなかったが、かれはそのようなことにおかまいなく、松田秀雄等と

共に教育会設立の趣旨書を各方面にまわした。

「吾等同志是に感ずる所あり一の団体を組織し東京市教育社会の機関として一方に市の教育事業に忠実なる援助者となり一方に市教育上の公議と論を發表して懇切なる警告者となり以て斯道に貢獻せんことを期す」⁽⁴⁾

かれらは、同年七月二八日、發起人会総会を開いて正式に東京市教育会を発足させた。この時發起人に名を連ねたものの中には、井上哲次郎、井沢修二、井上円了、岩崎久弥、鳩山和夫、同春子、穂積八束、徳富猪一郎、安田善次郎、前島密、渋沢栄一、副島種臣、榎本武揚、沢柳政太郎、跡見花溪、下田歌子等がある。發起人はこれら学界、教育界、政界、財界の知名人のほか、市長、市会議員、区長、区学務委員、市立小学校長等五八一名にものぼり、会長には星亨が就任した。

当時の東京をみると、東京府教育会はじめとし、市内一五区の六割がすでに教育会をもっていたから、教育界の組織化はかなりすすんでいたといえるであろう。東京府教育会の場合には、その発祥は明治一六年に発足した東京府教育談会にまでさかのぼることが出来る。それは明治二年には正式に東京府教育会となっている⁽⁵⁾。また区の教育会としては、明治一四年設立の芝区教育会をはじめとし、下谷（明治一八年設立）、京橋（明治二一年）、麹町（明治二三年、麹町区公民会教育部）、日本橋（明治二三年）、神田（明治二三年）、本郷（明治二七年）、麻布（明治二九年）、牛込（明治三二年）の各教育会があり、また市教育会設立の直前には浅草区教育会も組織されている⁽⁶⁾。

では、これらの府や区の教育会は社会教育に対しどのような態度をとっていたかといえば、東京府教育会は明治二一年七月一日制定の東京府教育会規則に、

第十五条 本会ハ特ニ學術講習所又ハ通俗教育談話会ヲ開設スルコトアルヘシ

と規定し、通俗教育への道を開いた⁽⁷⁾。また区のレベルでは、環境の悪さから衛生面での通俗教育が必要であった下谷区や庶民の信仰と娯楽が同居する浅草区などで、すでに講談会形式の通俗教育が行なわれていた形跡がある。たとえば下谷区の場合には、次のような報告がなされている。

「明治二二年下谷区公同会の設立せらるるや区内公私立小学校教員は其教育部員となり……自治部衛生部と共に定期の集会臨時の通俗講談会を開き専ら普通教育の改良進歩を計れり」⁽⁸⁾

当時の教育会はこのような例にもみられるように通俗教育への道を開いているところがかなりあったから、東京市教育会も発足して、事業計画を立てる段になるや、東京市教育事業の奨励、東京市教育上須要の事項に関する調査、教育・学芸等の講習会の開設等と並び、「図書館其他通俗教育に関する事業を経営する事」という一項を入れることになった。⁽⁹⁾そして、発起人会総会で事業計画が承認されるや、市教育会はただちに事業調査委員会を設置し、同年（明治三三）八月三日の委員会で、通俗教育に關しても「通俗教育演説会を開設する事」、「知名の士を聘し講談会を開く事」を決議している。⁽¹⁰⁾八月七日の同委員会では、矢継早に、

一、通俗教育演説会及講談会を開く事

(一) 通俗教育演説会は時々各区便宜の場所にて開会する事

(二) 講談会は隔月一回開会する事

(三) 委員若干名を置く事

を決定した。⁽¹¹⁾この決定により、東京市教育会は、不定期の通俗教育演説会と定期的な講談会を開くことになったのである。東京市教育会は、その後正式に講談会規程を次のように定めた。

第一条、本会は市内便宜の場所に於て時々講談会を開くものとす。

第二条、講談会事務の爲本会に委員若干名を設くるものとす。

第三条、毎区支会に於ては講談会委員を設け本会委員と協議の上講談会の事務を処理すべし、

但、支会設置なき区は会長に於て委員を設け講談会の事務を処理せしむ。

第四条、講談会費は本会に於て負担す。⁽¹²⁾

(二) 草創期の通俗講談会

第一回の講談会が開かれたのは、明治三四年二月二四日であつた。その日、東京市會議事堂には一五〇名の聴衆を集めて、東京音楽学校校長渡辺竜聖「風俗改良論の一、交際論」および寺田勇吉（東京市教育会副会長）「工業及商業教育」の講演が行なわれた。ただし、この日の聴衆はすべて教育会々員であつた点に注意しなければならない。第一回講談会開催の主旨について、寺田勇吉は次のように述べている。

「今日は東京市教育会第二回の講談会を開くことに致しまして、此処に演題を掲げてござります渡辺龍聖君の御高説を伺ふことになつて居ります。就

きましては渡辺君のことは、教育者諸君のことです。貴方がたも既に御承知のことと思ひます。抑東京市教育講演会第一回の講演者として渡辺君の御出席を煩はしたといふのは、東京市のみの問題ではござりませぬが、我國の風俗改良といふことは余程重大な問題でござりまして、大いに改良すべき点があると吾々は考へて教育には直接ではござりませぬけれども、余程重大な問題と考へました故に、今申し上げます通り、第一回の講演の劈頭第一に渡辺君を煩はした次第でござります。⁽¹³⁾」

これに対し、渡辺竜聖は聴衆に一般大衆層を想定して講演の準備をしたらしく、この講演会の特殊な性格にとまどいを表明している。

「私は、実は、本日は此の如き御歴々の前で御話を申し上げる積りで無つたのであります。普通の講演会であつて一般の聴衆も許さるのであるといふ積りであります。それでありまして、極普通の事柄を考へて書き集めて参つたのであります。それを貴方がたに申し上げるといふは、失礼であります。が、會員諸君のみが御出でになるのであるといふことは随分遅れて承つた故に考へ直す訳にもいかず、如何とも致し方ない次第でござります。それ故に申し上げることは、普通一般の人に申し上げることでありまして、貴方がたに申し上げることでござりませぬとして失礼に涉ることがあれば、偏に、御許あらんことを希望致します。⁽¹⁴⁾」

このことから推測されるように、当時の講演会は、東京市教育会の側では會員啓蒙のための教育に関する講演会と考へていたのに対し、講演を依頼された方では世間一般の人々が集まる通俗教育講演会と考へていたようである。そしてこのずれはその後もしばらく続くことになるのである。

ところでその時風俗改良を論ずるについて、渡辺竜聖は、

「私は、風俗改良といふことを以て、二十世紀を迎へたといふ考を以て居りました、其所で二〇世紀の始に於て、其問題として相統論、即ち家庭改良論、奉公論、即ち国民的生活論、交際論、即ち社会改良論、信仰論、即ち宗教論、趣味論、即ち国民の美術的嗜好に関する所の議論、これ等五問題に就て本年に於て普通講演を致したいと思ふて居るのであります。⁽¹⁵⁾」

と述べているが、風俗改良に二〇世紀の開幕を結びつけているのは、丁度明治三年が西暦一九〇〇年にあたり、明治三年から三四年にかけて、二〇世紀の始まりを一九〇〇年とするか一九〇一年とするかという「二〇世紀論争」がジャーナリズムをにぎわしていたからであつた。また、二〇世紀への曲り角に立つて、日本全体が後進性から脱皮するために、社会の底辺から生活様式を變革する必要性を痛感していたことも否むことが出来ない。すでに明治二〇年代の前半で、大日本風俗改良会はずから雑誌を発行し、風俗改良の問題と取り組んでいたものであり、東京市教育会主催の通俗講演会がいきなり冒頭で風俗改良論をとりあげたことも、たとえその聴衆が教員という特定の知識層に限られていたとは

いえ、当時の社会教化の中心問題を象徴的に表わしていたということが出来るように思われる。

講談会は続いて三月一六日に第二回が開かれ、森田茂吉「教育と警察」、江原素之「公德の基礎」という二題の講演が行なわれた。場所は神田区一ツ橋の高等商業学校講堂で、聴衆は市教育会々員及び傍聴人六〇〇余人と記録されている。⁽¹⁶⁾ただし、ここで傍聴人といわれるのは教育関係者か教育に関心を示す有識者であり、この頃はまだ一般庶民とは程遠い講談会であった。森田茂吉の「教育と警察」も先の風俗改良論と関連があり、公德問題をとりあげるにあたっては、学校教育だけでこれを解決しようとしても意味のないことを警察行政の立場から論じたものである。

「諸君私は森田です、曾て文部省に食録したことがあります、教育のことに関しては、全く白人であるのです、去りながら警察のことに付ては、多少警察行政に関与したこともありますし、又不肖ながら聊か研究したこともあります、で警察的事項に付ては、多少議論を持つて居りますものです。……過日衆議院の政府委員室で、少閑を得ました際に、会々文部省の上田局長、寺田君杯二三の人士が「ストープ」を囲んで、例の豪傑談を試みてるとき、近時聳々たる夫の公德養成問題も出て来たのです、所で私は上田君寺田君杯有力なる教育の当路者に対して、君等は公德問題を喫々せらるるが、狭き学校内だけで此問題を解決せんとした所で、其結果は甚だ鮮い、見玉へ中等以下の人々の理想の「モデル」は寄席にあるのだ、講談落語、乃至義太夫杯の青年者又は中等以下の人々に及ばず感化力といふものは、学校教師の百万遍の講義より至大なるものだ……私が嘗て警視庁に居りましたときに講談師、落語家、杯を召喚して戒告したる論法を以て大に吹き立てたる所、豈に図らんや傍に居る所の寺田君が、森田君の話は尤である、大いに聞くべしだ、今謂つた所の説を此次きの講談会に出て来て話をして呉れぬか、と切り込んで来られた、こりゃ失敗しやうばいだと思つたが、既に及ばないで、止むを得ずして此の席上に登つた訳である……」⁽¹⁷⁾

このようにして、東京市教育会の講談会は発足したが、明治三四年はもっぱら支部会の総会時に開かれることが多かった。したがって、たとえ傍聴者がいるにせよ、聴衆に教育会会員が中心であり、また講演内容も教育関係のものに傾斜して行つたのは当然の成り行きであつたといえる。明治三四年度に東京市へ提出した補助金下付の請願書中には、

「毎月知名の士を聘し教育講談会を開きて通俗教育の普及を謀り……」⁽¹⁸⁾

というくだりがあるが、ここでいう教育講談会は大衆性をもつ通俗教育のための講談会ではなく、むしろ教育問題についての講談会といった性格が強く、教育会内部での講談会という色彩をおびていた。

しかし、明治三六年になると講談会は次第にその性格を変えて行つた。まず、これまでは本郷中央会堂、帝国教育会講堂のような市内のホールを会場として行なわれていた講談会が、会場を小学校へ移し、父兄の勧誘を行なうといった、より広範な層への働きかけを開始した。それは

いうまでもなく、講談会の大衆化をねらったものであった。次に、その動きに呼応して講演内容も題材の範囲が拡大され、明らかに一般父兄を対象に想定したような講演も登場してきた。たとえば、明治三十六年五月一六日、麹町区麹町小学校で行なわれた講演会では、刺殺された星亨の後を受けて市教育会々長となった江原素之の「倭約の字義」という講演が行なわれたり、同年一〇月三日の本所区向島牛島小学校での講談会には、信夫恕軒「義士銘々伝」という講談が付け加えられたりしている。⁽²⁰⁾

だが、明治三七年になると東京市教育会は最大の試練をむかえ、通俗講談会どころか教育会自体の存続もあやぶまれる状態に陥った。この年、東京市から市教育会に与えられていた補助金三〇〇〇円が削除され、教育会の事業運営はほとんど不可能になってしまったのである。そのため区支部会もあいついで独立し、一時は三〇〇〇名を誇った会員数も一〇〇〇余名を数えるのみとなった。理由はいうまでもなく、同年二月に始まった日露戦争の影響で市の事業全般にわたって緊縮、繰延が行なわれたためである。⁽²¹⁾市教育会は辛うじて存続しえたが、通俗講談会どころの話ではなかった。⁽²²⁾

しかし、翌三八年には東京市長尾崎行雄の名で東京市教育会に補助金一五〇〇円交付の広告があり、教育会はようやく危機を脱した。そして、市教育会の三八年度予算三六三〇〇円のうち四三五円が講習会及び講談会費にあてられ、講談会も再び開かれることになったのである。この時東京市より通俗講談会に付せられた条件は次の通りであった。

「明治三九年三月迄の間に於て各区に二回以上開会すへし、但必要条件は当役所に於て指定することあるへし、聴講料等を徴収せざること、会場日時講演者氏名等は予め開申し其成績は翌月五日迄に報告すへし」⁽²⁴⁾

この条件にもあるように、当時の通俗講談会に東京市の意向がかなり強く反映されていたことは否定することが出来ない。その後、内務省からの補助金が出されるようになると内務省の意向が働くようになるのだが、それにはまだ数年の歳月が必要であった。しかし、当時は日露戦争中のことであったから、講談会は早速時局に関する講演を多くとり入れ、間接的に戦意の高揚をはかり、精神的にナショナルな統一をはかる教化活動の一環として役割を果たしたのである。日露戦争中は、新聞、雑誌のみならず、すでに輸入されていた活動写真も動員されて、東京市内でも明治三十七年五月一日に神田錦輝館で従軍実況活動写真が上映されたり、三十八年一月一日には明治座で大本営発表認可写真、日露戦争活動写真の興行が行なわれたりするなど、国内はわきかえっていた。そのような状況の中で時局講演会もひんぱんに開かれ、好戦気運をあおった。それが

戦後の教化政策における講談会形式への傾斜を決定的にしたといってもよいであろう。

「通俗教育の施設事項中通俗講演会は最も広く行はるる所にして、早きは既に明治三二年頃より之を実施せるものと雖も、其の一般に普及するに至れるは実に明治三七、八年戦後の頃なりとす。當時に在りては専ら義勇奉公の精神を鼓舞せんか爲に開催せるものなれとも、一面広く通俗教育上に資する所少からざりしに依り、明治三九年本省（註——文部省）より通牒を發し之か奨励を為し……」²⁵⁾

東京市教育会主催の通俗講談会が戦後評価されるようになったのも、このような脈絡の中においてであった。

日露戦争中の東京市通俗講談会は、極端に軍事色を強めたわけではなかったが、それでも三八年度中には戦争に関連のある講演が半数近い講談会で行なわれている。たとえば、医学士栗本康勝「軍国の衛生」、陸軍歩兵少佐小出六郎「実戦談」（明治三八年七月二三日浅草区松葉小学校での講演）などはその例であり、また、杉浦重剛、井上円了、三宅雄二郎らと雑誌「日本人」（明治二十二年創刊）を発行し、欧化主義に反対して日本主義を鼓吹した志賀重昂の「武賢文強清富の説」（明治三八年六月一四日本郷区中央会堂、七月一八日本所区相生小学校での講演）も国民のナショナリズムをかきたてる講演であった。

日露戦争が終るや、日本は疲弊した国力を回復するために所謂戦後経営に乗り出すが、東京市教育会の通俗講談会も勤儉奨励の講演を多くとり入れ、その一端を担うことになった。そして皮肉にも戦争によってつぶれかけた講談会は、戦争のおかげでその効用を認められ、みずからの地歩を確保する結果となったのである。明治三九年には、市教育会が戦後の市民教育の重要性を認識し、通俗講談会の意義を認めた形跡があり、またこの年には講談会へ父兄を動員する働きかけがさかに行なわれている。たとえば、七月八日に四谷区役所で行なわれた講談会について、次のような報告がなされている。

「四谷区教育会役員諸氏は一方ならず斡旋尽力せられ会場及び聴衆の勧誘等には非常に熱心を以てせられ、為めに一般父兄の多数来会を見るに至り殊に主婦令嬢諸君の多数なりしは本講談の直接家庭に価値を顕するの機を得るに便ありしこと疑なし」²⁶⁾

この頃から、従来は教育に関する講談会と一般大衆向けの通俗講談会があいまいな形で混在していたものが、次第にその性格をはっきりとさせ、より広範な階層を対象とする一般的な通俗講談会へと統合され始めた。たとえば、明治三八年一〇月二十九日に東京市会議事堂で行なわれた講談会では、市視学浜幸次郎「市内小学校視察談」のような講演があり、まだ「教鞭をとるものに好資料を与えたり」といわれていたが、三九

年六月九日麻布区麻布小学校での講談会では、「父兄最多数を占め青年男女学生も多かり」との記事がみえている。²⁹⁾そして、この頃から講談会はすべて通俗講談会と呼ばれるようになるのである。しかし、実際にはなお一、二年は聴衆もやはり市教育会の会員や中産階級以上の人々が多かったように思われる。そのことは次の例からも推測されるであろう。

「此間こちらへ出て演説をしろと云ふ、どう云ふ御会合かと云ふことを聴きましたら通俗講談会だと云ふ、何でも区内の人や何かを集めてやる演説会と云ふ話でありましたから、成程それは宜しからうと、私も出て行かうと賛成をして置きました、今日一寸玆へ立つて御様子を伺ひますと、何でもあなた方が演説をして聞かして下さりさうな方だ、どうも通俗講談会と云つても、通俗講談会の師範学校とでも云ひさうな御様子、さう云ふ資格のある方に見えて、一寸私は演説の方角に惑ひました。で少しく迷惑するけれども、先づあなた方を、所謂区内の人民と、斯う見て、何でも南瓜か、茄子と、斯う思つて、私の考へを申し上げます、」(山路弥吉「古典論」明治四十二年二月二十九日本郷区真砂小での講演速記。³⁰⁾)

明治四一年度になると、四月二五日夜谷区御徒町小学校での講演、吉田静致「教育の真意義」、山路弥吉「英雄と人材」、に四〇八名(男三〇五、女一〇三)の聴衆が集まり、「近來の盛会なりき」といわれた。³¹⁾量的拡大の始まりである。そして、七月一日に東京市教育会は職工徒弟のための通俗講談会を開くに至っている。この時は、神田区錦輝館で三六二名(男三五〇、女一二二)の聴衆が集まり、留岡幸助「正直と勤労」、江原素之「職工徒弟の精神」、の講演が行なわれ、余興として講談、薩摩琵琶、蓄音器数番があった。これは、「主として職工徒弟に資するの目的なりしを以て從來挙行せるものより一層卑近のものにして実に本会を第一回とす」³²⁾

といわれるように、東京市教育会が始めて下層に目をむけ、社会教育の面でも下層の教化に乗り出す第一歩となつたものであった。

しかも、明治四一年一〇月二三日に精神作興に関する「戊申詔書」が換發されるや、通俗講談会は直ちに詔書の浸透をはかるべく、樋口勸治郎「戊申詔書と巴里風俗」(四十二年一月三日本所区相生小学校での講演)、田川大吉郎「勤儉貯蓄」(四十二年三月一三日芝区台町小学校での講演)等を取り入れている。この戊申詔書をきっかけとし、東京市教育会主催の通俗講談会は全く新たな局面を迎えることになるのである。

二、通俗講談会の拡張と細民教化

(一) 通俗講談会の拡張

日露戦争時の時局講演会により講談会形式の国民教化の有効性が立証された形となると、戦後の通俗教育は講演会・講談会全盛の時代をむか

える。東京市教育会も明治四二年六月二三日の理事会で「通俗講談会拡張に関する件」をとりあげるに至った。⁸³⁾明治四二年は、東京市教育会主催の通俗講談会がより広範な人々を対象とする通俗教育に取り組むための準備の年であったともいえる。たとえば、講演題目だけをみても、一方で井上哲次郎「教育と救済」(明治四二年七月一〇日小石川区柳町小学校での講演、聴衆四六〇名)、田川大吉郎「教育普及の精神」(同年一月二七日浅草区山谷堀小学校での講演、三〇四名)、三沢糾「泰西教育界趨勢の一面観」(四三年二月二七日赤坂区青山小学校での講演、二三八名)のように、明らかに教師を中心とする知識人層を対象に想定していると思われるものももちろんながら、他方で下田次郎「富と修養」(四二年五月一五日日本橋区常盤小学校での講演、三五〇名)、江原素之「感受性の修養」(同年六月一五日下午谷区鶯谷伊香保での講演、三七四名)のような修養論や下田次郎「年の暮」(同年一二月四日芝区靱絵小学校での講演、四一九名)といったような、これまでとは異質の、より庶民的な方向をむいた講演が行なわれるようになったのである。

しかし、それにも増して所謂通俗化の方向に拍車をかけたのは、この年から講談会には必ず余興が行なわれるようになったことであった。先にあげた下田次郎「富と修養」に真竜齋貞水(後の早川貞水)「孝子談」があわせ演じられたのをきっかけに、貞水、細川風谷、伊藤痴遊(初代)等の講談が余興としてとり入れられて行く。この年、通俗講談会の聴衆は前年にくらべ一回平均一一一名の増加をみている。東京市教育会の四二年度会務報告によると、これは「市民の漸次講談会の有益なることと認むるの証ならんか」⁸⁴⁾とされているが、むしろ余興の及ぼした影響とみた方がよいように思われる。ここに通俗講談会はようやく一般庶民を教化するための基本的な形態を整え終ったこととなるのである。

明治四三年、東京市教育会は細民居住地帯における特別通俗講談会の開催に踏み切った。第一回は下谷区万年町の万年小学校で開かれたが、万年町は東京市内でも有数の貧民窟をかかえた地域であった。四月二八日に開かれた第一回講談会では、江原素六「家庭について」、子爵五島盛光「戸籍に就て」の講演が行なわれ、竹本瓢の義太夫「仙台萩」が余興として行なわれた。

「本会に於ては年一五回以上の通俗講演会を開らき市民の啓発善導に力を尽し居りしが今般内務省より四百円の助成金を下付し細民訓育の爲め励精努力其の効果を収めんことを条件とせられしに依り従来の方法を改良し更に特殊部落に於いても講演会を開催するの計画を立て多田理事を通俗講演会主任となし四月二十八日其の第一回を下谷区万年町なる万年小学校内に開く聴衆千余名満場立錐の地なかりき」⁸⁵⁾

このように細民を対象とするところまで拡張された明治四三年の通俗講談会は、内容的に言えば次のような特色をもっていた。まず第一に、

家族論や婦人論が新たに登場してきた点をあげることが出来る。たとえば、江原素六「家族觀念に就て」（明治四三年七月二日下谷区竜泉小学校での講演、聴衆一五一五名）、下田歌子「現代の婦人の心得」（同年一〇月二日麻布区飯倉小学校での講演、三二〇名）などがそれである。これらはいずれも天皇を長とする家族主義的国家觀を前提とする家のあり方や家庭婦人のあり方を説いたものであった。なお家族論は細民地帯でも説かれたが、そこには貧民対策の一環として、細民社会における家庭の崩壊状況をとらえ、家庭の再建から貧民救済を行なおうとする発想があったことを見逃すわけにはいかないであろう。先にあげた江原素六「家庭について」などは明らかにその系譜に属するものであった。

第二の特色としては、戊申詔書普及のための勤儉論がますます増加して行ったことをあげることが出来る。根本正「忠実業に服すに就て」（明治四三年六月一九日四谷区鮫橋小学校での講演、四三七名）、河原田嘉吉「勤儉忍に就て」（同年九月三〇日下谷区万年小学校での講演、五〇八名）などは明らかに戊申詔書の解説である。その他、当時内務省の囑託であった留岡幸助「勤労の意義と其価値」（同年十一月一日京橋区月島小学校での講演、四四九名、ほか五回）や、同じく内務省囑託の生江孝之「希望数ヶ条」（四四年二月一〇日麻布区絶江小学校での講演、二八五名、ほか一回）などは、報徳の精神による勤儉論であり、戊申詔書の精神をさらに具体的な生活様式のレベルにまでおろして一般庶民や細民に働きかけようとするものであった。

明治四四年になると、文部省は通俗教育調査委員会を設置し、通俗教育の振興をはかろうとしたが、さらに内務省の強力な教化政策もてつたって、通俗教育は脚光をあびるところとなった。東京市教育会主催の通俗講談会は首府の中心地帯で行なわれていたこともあって、直ちにその影響を受け、ここに最盛期を迎えることになる。通俗教育調査委員となった巖谷小波が、

「東京市教育会は既に文部省の通俗教育に則つて講演会を始めた。私は通俗教育普及の一手段として、各府県に於ても亦この方法が取りたいと思ふ」⁸⁶⁾

と述べているように、当時この通俗講談会是一種のモデルとみなされていたといっても過言ではない。明治四四年五月、帝国教育会主催全国連合教育会に対して行なわれた文部省の諮問「通俗教育に關し其の地方に於て施設せる状況如何」の件につき、東京市教育会は次のような回答を行なっているが、

明治四三年度分につき

一、市直営の講演会、年四回、聴衆三四四六名。

東京市教育会主催「通俗講談会」の展開過程

一、市教育会経営の通俗講演会

普通講演会、年三七回、一七五九一名。一回平均四七五名。

商工講演会、年三回、一四六〇名、一回平均四八七名。

一、各区教育会経営のもの

通俗講演会、年一八回、六二〇名、一回平均三四六名。³⁷⁾

これらの通俗講演会に関する限り、東京市教育会もみずからの先駆性を意識し、誇りにしていたことは、次のような田川大吉郎（当時市助役）の回想からもうかがい知ることが出来るであろう。

「数年来文部省の採り来つた社会教育の施設を観ると、その主なる事業は、通俗講演であつたらう、而して所謂通俗講演は、東京市教育会の多年行ひ来つた所で、その方針は全然其拳を一にして居る、ただ、世間の通俗講演は、文部省の奨励を待つて興つたるに對し、東京市教育会の通俗講演は、文部省の奨励を待たずして興つた差異があるまでである」³⁸⁾

急速な伸びを示し、拡張が続く明治四四年の通俗講演会は、内容面からみると処世術論や人生論の増加と市民意識の形成にかかわる講演が出現したところに特色があつた。処世術論や人生論としては、たとえば実業之日本社々長増田義一「世渡りの心得」（明治四四年九月三〇日麹町区富士見小学校での講演、三四九名、ほか一回）、同「活動と幸福」（同年十一月三日本所区茅場小学校での講演、一五五八名、安井哲子「からっぽの生活とみのある生活」（同年九月二四日本郷区誠之小学校での講演、婦人のみ二一〇名、嘉悦孝子「自信ある生活」（同年一〇月七日小石川区小石川高等小学校での講演、婦人のみ三四八名）等があり、市教育会理事多田房之輔「如何なる人が肩身の広き人なるか」（四五年一月二一日麻布区絶江小学校での講演、六〇三名、ほか三回）のように教育会首脳が直接一般庶民の信念体系の部分に働きかけるものもあつた。また市民意識形成にかかわるものとしては、東京市調度課長大橋重省「明日の市民」（四四年十一月七日深川区霊岸小学校での講演、七一三名、ほか一回）、日下部三之助「善良の市民たれ」（四五年一月二〇日小石川区林町小学校での講演、五一〇名）、同「都市の責任」（同年二月一八日深川区霊岸小学校での講演、五〇五名、ほか一回）等の諸講演が行なわれるようになって行つた。

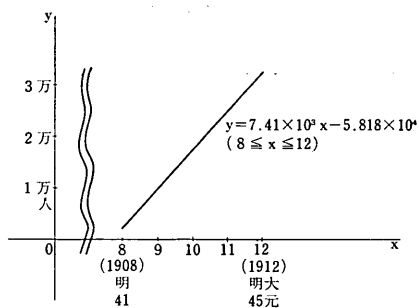
さらに、明治四四年は余興の面でも一つの期を画した年である。なぜなら、従来から行なわれていた講談の他に、活動写真がとり入れられ、幻燈も多く使われるようになったからである。ただし、余興とはいえ、幻燈は「教育勸語」や「勤儉勸語」（戊申詔書）についての解説がほ

とんどであり、活動写真も教育活動写真と称されるものばかりであったから、内容的にはおのずと限界があった。しかし、当時はまだ物珍らしさが手伝ってか非常な人気を博していた。余興に活動写真がとり入れられた時の通俗講談会の模様については、次のような教育会側の報告があるが、教育会は活動写真の人氣に目をつけその教化的機能をいちはやく利用しようとしていたのである。

「本月（引用者註——明治四四年二月一日）午後六時より神田美士代町青年会館にて商工徒弟の爲め通俗講談会を開催したるに定刻前より三々五々聴衆の来会あり、多田同会理事開会の辞を述ぶる頃には既に千人余を算し猶続々として東より西より終に満場立錫の余地なき盛況を告げ千四百人に垂れんとする商工徒弟を中心としたる聴衆は実業界の重鎮大田黒重五郎氏の一時間に余る大演説にチャームせられて或るものを求めんとする熱心面に表はれ、理想に活き将来に活きんとする小国民の急激の如き拍手に送られて大田黒氏が降壇せらるるやエムバレー商会独特の幻燈を映写し尾崎東京市長（引用者註——尾崎行雄のこと）阿部東京府知事の肖像に次て戊申詔書に関する映画數番説明者三橋伝蔵代辞藻玲敏得意の快弁を振つて遺憾なく最も深き印章を与へたるは氏を待て望むべきのみ、終て活動写真數番同商会所属弁士のオーソリチー岩藤思雪氏等銀盤上に玉を転がす底の美音声を張て説き去り説き来り其妙所に至つては観者をして宛然画面の中の人たらしむる想あらしめたり……」

明治四五年の東京は元日からいきなり市電のストが行なわれ、前途の波乱を思わせたが、東京市教育会の通俗講談会は通俗教育振興策に乗つて前年に引き続き盛んであった。聴衆動員状況の傾向をとらえてみれば、第一図の如く明治四一年以降は直線的な伸びを見せ、明治四五年は通

第1図 東京市教育会主催「通俗講談会」の聴衆數
—明治41~45年の場合—



俗講談会開設以来の最高記録をしるした。男女の比率はだいたい男五・五に對し女四・五である。

明治四五年度の講演内容は、明治四四年とほぼ同じような傾向を示している。ただ、新たなオピニオン・リーダーとして、従来の江原素六、志賀重昂らに加え、みずから社会教化を終生の課題とみなした加藤咄堂が数多くの講演を行なうようになった点に注意を払う必要がある。咄堂の講演範囲は「国民の精神的基礎」（明治四五年五月二五日麻布区麻中高校での講演、二七八名）、「新武士道」（同年六月一五日本所区牛島小学校での講演、三二四名）のようにナショナルリズムの高揚をめざすものから、「人の運」（大正元年一月二日麻布区筈小学校での講演、四五三名）、「人情の差」（同年二月二八日京橋区月島小学校での講演、六

第1表 東京市教育会主催「通俗講談会」の開催回数
——明治41年～大正5年——

明治41 (1908)	42 (1909)	43 (1910)	44 (1911)	45/ 大正元 (1912)	2 (1913)	3 (1914)	4 (1915)	5 (1916)
13 回	19	33	47	60	43	38	23	29

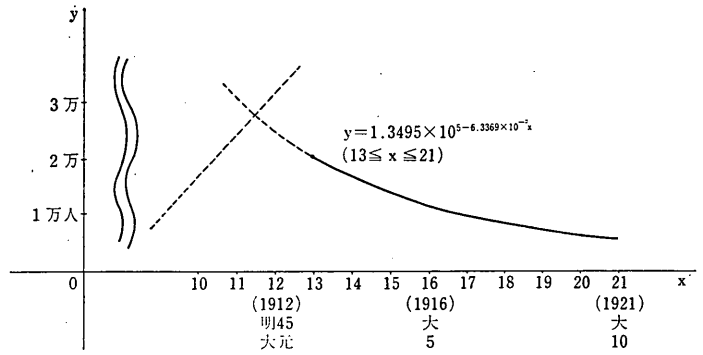
六九名)のような庶民の生活意識の問題に至るまで、きわめて幅広いものがあつた。

しかし、明治四五年という年に明治四四年と同じ意味を持たせるわけにはいかない。四五年は、何といつてもこの年で明治が終つたという点で大きな意味のある年であつた。明治天皇の死は各方面に大きな衝撃を与えたが、東京市教育会の通俗談話会にも想像以上の影響を及ぼした。というのはこの年を境に通俗講談会は急速に衰えはじめ、展開過程を追う限りでは明治と大正の間に大きな断絶があつたからである。たとえば、開催回数をみても明治四五年をピークにして大正期は減少の一途をたどつたが(第一表)、聴衆の動員数は明治と大正の間に明らかな断層があることを示している。大正に入ると、開催回数の減少とあひまつて、聴衆数は明治期にみられたような直線的な伸びが姿を消し、第二図の如き指数曲線の退潮を示し始めた。

一般に通俗教育はその時々 of 社会的風潮に左右され、流動性をその特徴としてきただけに、講談会ブームを呼んだ「明治」の終焉は手痛い打撃だつたといえるであらう。大正という新しい時代を迎え、政府自体も新体制を確立しようとしていた大正政変期に、新しいヴィジョンを打ち出せなかつた通俗教育は明治の遺物であるかの観を与えた。明治四四年に設置された通俗教育調査委員会は大正政変で誕生した山本内閣のもとで行政整理にあひ、あつさり廃止されるうき目にあつたにもかかわらず、文部省は何ら新政策を打ち出すことなく、さしあつては通俗講談会の普及していない地方にそれを徹底させるという消極策をとつた。東京市教育会主催の通俗講談会についていえば、かかる文部省の方針に加えて、内務省系列の行政整理による事業費大幅削減で奨励費、補助費が全部廃止され、地方改良事業の補助金も打ち切られたため、従来のような通俗講談会を開催することが不可能になつた。たとえば、大正三年度の東京市教育会予算は総額六七八〇円でそのうち講談会費は一四〇〇円を占めていたが、補助金の打ち切りにより実際に使用出来たのは九七四円余りで、通俗講談会の回数を減らざるをえない状況に追い込まれていったのである。⁽⁴²⁾

大正に入ると、講演内容の面でも明治調は急速にうすれて行つた。明治末期は細民のための通俗講談会に力を注いだこともあつて、庶民の日常生活のレベルにまで降りた処世術論や生活意識にかかわる教化講演が多かつたが、大正期になると、それにかわつてナショナルな利害への

第2図 東京市教育会主催「通俗講談会」の聴衆数
——大正2年～大正10年の場合——



関心をたかめようとする講演が増加している。アメリカで起った排日運動にからむ志賀重昂「加州排日問題と教育」(大正二年五月一五日本所区本所高小での講演、三七七名、ほか三回)、同「日本は何故に貧乏になるか」(同年一月二一日麹町区麹町小学校での講演、八九四名)等はその例であり、また大正三年六月の第一次世界大戦勃発にともなう小塩均一郎「時局に就き吾人の覚悟」(大正三年九月二七日本所区三笠小学校での講演、三五七名、ほか一回)、茅原華山「欧州戦争と日本の将来」(同年一〇月二日小石川区林町小学校での講演、八二四名)、同「欧州戦争と新勤王論」(同年二月一日日本郷区高小での講演、四六七名)、下田次郎「戦争に就きての教訓」(同年二月七日麹町区番町小学校での講演、四二八名)も日露戦争時ほどの切迫感はないにしろ、再度ナショナルな問題への関心を喚起しようとするものであった。またそれに呼応し、余興にも当時の東京における琵琶の流行を背景として、筑前琵琶「赤垣源蔵」、「白虎隊」、薩摩琵琶「義士討入」等がとり入れられている。

(二) 細民のための通俗講談会

東京市教育会主催の通俗講談会がむかえた最盛期は、同時にまた東京市教育会が細民のための通俗講談会に最も力を注いだ時期でもあった。正確な言い方をすれば、細民のための通俗講談会に銘打ったわけではない。しかし、内務省の補助金を受け、細民居住地帯で開催することを義務づけられた分については、主催者側にそれなりの意図があったことはいうまでもない。そこで、次に、細民のための通俗講談会をとり出し、その輪廓を明らかにしておくことにしよう。

内務省より補助金が出されるにあたっては、時の内務大臣平田東助の名で次のような条件が付されている。

国民訓育ノ事ニ関シテ格別ノ尽力ヲ以テ其ノ効果ヲ収メムコトヲ望ム依テ助成ノ為メ玆ニ金四百円ヲ下付ス。(43)

この補助金は明治四三年三月二六日付で下付されたが、それを受けて阿部東京府知事は四月二八日に次のような通牒を発した。

東京市教育会主催「通俗講談会」の展開過程

「國民訓育ノ事ニ関シ格別ノ尽力ニ依リ其ノ効果ヲ収ムヘキ旨ヲ以テ助成金ヲ下付セラレタル処右ハ貧民部落ニ於ケル通俗講話會費ニ充ツルコトヲ条件トセラレタルモノニ付其ノ条件ニ遵ヒ励精努力以テ其ノ効果ヲ収メムコトヲ期セラルヘシ。」⁽⁴⁴⁾

かかる内務省の補助金下付は、当時内務省が提唱していた地方改良政策の中に位置づけられる。この点につき、内務官僚の第一人者とうたわれた参事官井上友一は地方自治訓練の方法中に教育的方法をも含めており、東京市教育会の通俗講話會はまさに教育を利用した町村改良の一例だとした。

「此頃東京市の小学校で貧民講話を始めました。例へば江原素六翁に有益な話をして貰った後に或は講話を聴かせたり又は義太夫を聴かせたりするので、大変人が楽しみにして参つて聴衆を入れ切れぬといふ位の有様であります。斯ういふ事業に向つてはこれは一種の貧民教育でありますから、救済事業として内務省から補助をしても宜いといふ考であります。」⁽⁴⁵⁾

井上友一によれば、このような教育的方法をとるゆえんはつまるところ公共心の育成にあった。

内務省の補助金を受けた市教育会は、当時東京市が細民居住地帯に設立した細民のための市立特殊小学校を拠点として通俗講話會を開き始めた。市立特殊小学校は、市教育会と同じく、明治三三年五月の皇太子婚礼の際の教育奨励金下賜を契機とし、

「下層社会の児童を收容し特殊の設備を以て之に義務教育を施すと目的とす」⁽⁴⁶⁾

として、明治三五年以降順次設立されて行ったものである。明治四五年現在の分布状況は第三図の如くであったが、中でも万年小、鯉ヶ橋小、芝浦小は、下谷万年町、四谷鯉ヶ橋、芝新網という市内三大貧民窟として有名な細民居住地帯を背景に設立されたものであった。

「下谷万年町及山伏町の辺は、市内に於ける有名な貧民窟にて芝の新網、四谷の鯉ヶ橋と並び称せらる」

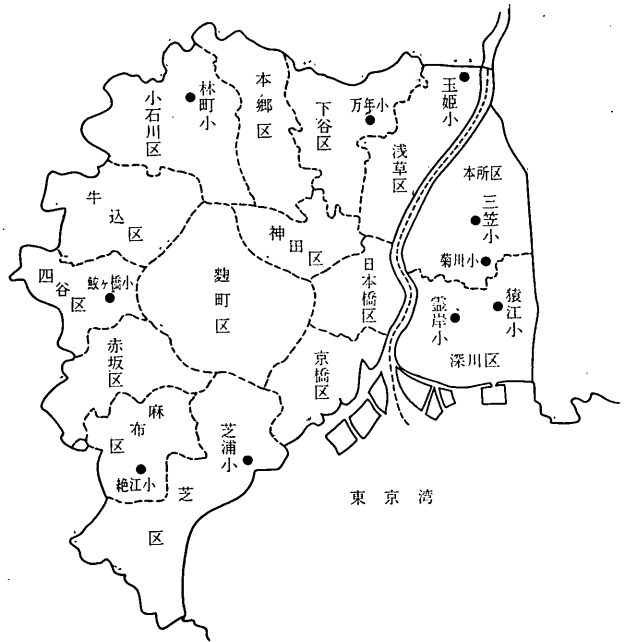
その住居は、

「一棟の陋屋を七八戸より乃至十数戸に仕切りたる所謂九尺二間の棟割長屋にして、或は壁の落ちたるあり或は闕の朽ちて戸締りの成らざるあり」⁽⁴⁷⁾

といった状態であったが、その他の貧民窟もほぼこれと似たようなありさまであつた。しかし、同じ貧民窟といつても、雰囲気はそれぞれ異なるところがあり、添田知道は小説化した万年小学校長坂本竜之輔に託してそれを次のようにとらえている。

「四谷鯉ヶ橋は万年町に較べると遥かに規模が小さかつたが、しかし、芝居機敷のように入り組んだそれは怪奇であり、不気味さをたたえていた。芝新網はごみごみとした長屋の集合体で、不潔感があつたが万年町ほどの不気味さはなかった。麻布日ヶ窪、龍土町のは極く小部分であつたし、牛込長延寺町もさ

第3図 東京市立の特殊小学校の分布
—明治45年現在—



ほどのものではなかった。本所花町はむしろ明るく、深川蛤町も小さく、木場に近く住者は多く材木屋の下に働くという職業的統一があるところから健康的でさえあった。浅草は田中町浜橋辺に特殊な匂いがあり、妻籠町が局部的だが困窮の度が甚だしく思われた。⁽⁴⁸⁾

かかる細民居住地帯の職業構成といえば、万年町では紙屑拾いが大部分で、あとは上等の部類が人力車輓き、下駄の齒入れ等であり、団扇編み、マッチの箱張が「重なもの」としてあげられる程度であった。⁽⁴⁹⁾ また、四谷区鮫ヶ橋小学校の親の職業については、人力車夫が過半数を占め、その他は草刈婦、葬儀丁、練瓦師の手伝い等の日雇がほとんどだとされている。⁽⁵⁰⁾

このような細民居住地帯で通俗講談会が開かれたのは、すでに述べたように、明治四三年四月二八日下谷区万年小学校におけるものが第一回であった。それ以後、細民のための通俗講談会はたて続けに開か

れて行つた。同年五月二二日深川区豊岸小学校での講演は南条文雄文博「老子の三室に就て」であり、早川貞水「人の母に就て」という教育講談、および幻燈説明が行なわれた。聴衆は八二四（男三二五、女四八九）名であったが、「会場せましく空しく校外に立つもの約二百名ありたり」と報告されている。続いて五月二九日には浅草区玉姫小学校で開催され、江原素六「貧民の成効に就て」の講演が行なわれ、教育講談早川貞水「立志談」が演ぜられた。「此日終日烈雨なりしも聴講者男二百十人女四百三十五人合計六百四十五人を算し同十時閉会せり」と報告されている。⁽⁵¹⁾

ところで、内務省は補助金を出すと共に内務省囑託の講師陣を通俗講談会に送り込んだ。生江孝之、留岡幸助、田中太郎等がそれである。かれらは二方で戊申詔書精神を細民層にまで浸透させる機能をはたして行くことになったが、他方では江原素六等と共に細民の生活意欲向上をは

かる細民教化をも行なっていたことは認めなければならない。たとえば、細民のための第一回通俗講談会における江原素六「家庭に就て」においても、

「江原素六氏は家庭に就て人の生るるや富豪者も貧窮者も異なるものにあらす誰か三井令嬢は振袖を着て生れ岩崎の令息は冠を冠して生ると言はんや只教育の如何之れをして然らしむるのみ今や天皇陛下の御趣旨は一視同仁なり富豪者なく貧窮者なく同一の教育を受けさせ給ふなり諸君は宜しく奮勵し温健なる家庭を造り子弟教育の道を尽くし幾多の名士高官を出さんことを望むと述べ……」⁵²⁾

と報告されているように、階層上昇への意欲をかき立てようとする一面があったのである。かれらは細民の階層上昇が実際には不可能であることを知っていても、それが精神的に国家基盤を強化するという効果をねらっていたといえる。その他田中太郎「なくてはならぬ人になれ」(四年五月三〇日下谷区万年小での講演、二七九名)なども明らかに細民の無氣力を払拭し、勤労への意欲をたかめようとする試みであった。

しかし、それがただだけ効果があつたかという点になるとかなりの疑問が残る。万年小学校における第一回のそれを取材した都新聞記者は、主旨に賛意を表しながらも細民の心情を無視した主催者側の慈善的姿勢を批判し、かつ権力をかさにきた聴衆の取締りと壇上にならぶ官僚に象徴される高姿勢を批判したが、記者の眼に映ったのは、高名な講演者の有益だと称される講演よりも無料で聞くことの出来る寄席的娯楽に関心をよせる細民の姿であつた。明治四三年五月九日から十日にかけて掲載された記事には次のように述べられている。

「吾人は其第一回を下谷万年町の特殊小学校に聞いた、其の小感を述べる、子供を連れて来る事はならぬとは開会前の触れ出しであつた、貧乏人の子沢山は通り相場であるが、彼等はまた中々子煩悩なものである、減多に子供を内において出るといふ事は無い、情に於てもさうだし境遇上も亦許し難い事である、果せるかな当夜切角の催しにも初めは百二百の聴衆が覚束ない程であつた、其から子供を連れて来るといふと忽の間に雪崩をうって押寄せた、」

場内の様子については、

「入口には正服巡査が佩劍緒々として突立って居る『オイオイ静かにしろ！ 座れ座れ座らなくっちゃ取締も何も出来たもんぢやない』と口喧ましく罵つてゐるのや、私服の刑事巡査が三人までも物騒らしくキョロついて居たのは居何計り此催しを傷つけたか知れない、

加之演壇側の正面には内務省や市役所のお役人とか先生方が椅子に倚つてメラリと並んで満場を睥睨して居られた、之れは甚だ妙でない、望むらくは会の方部の人々が打碎けたる心を以て会衆の中に交りオイ君面白いぢやないかと肩を叩いて相樂しむといふ態度でやってほしい」

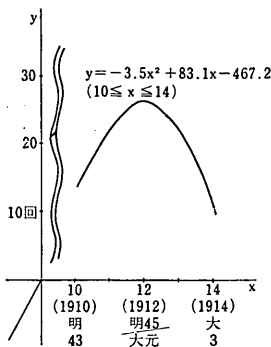
としているが、特に批判の対象としているのは教育会側の細民に対する態度の官僚的硬直さであつた。

「由来貧しき人々に威圧がきかうと思ふのは根本的の誤解で、彼等は世の所謂強者といふ者を呪ひこそすれ敬うては居らない、江原素六翁を紹介するに方っても翁は世界に名高き偉人であるといふ挨拶は決して一同をひきつける力が籠って居らぬ、其よりも翁が貧しさ家庭に育った事や翁の今日も富に於ては諸君と相距る僅か一步だといふような事がどれ程会衆一般の心を動かすかも知れないのだ、而して又此会合を真実彼等に同情ある催しだと信ぜしむる事は根本の要義である、苟且にも紳士の道楽や虚栄や物ズキで企てられたものだと思はせては駄目になる、竹本瓢の義太夫が済んだ時俄かに一同が起上って帰らうとしたのは次の講演がそれ程聞きたくなかった為でもあらうが又一つには写真師が撮影にかかったからである、後方からでもあらうことか正面から面と向って一同の写真をとる、これが貧民の会合です寄席にゆくこともできないやうな人々を集めて義太夫などを聞かせたのだと手柄顔に吹聴せらるる事は彼等と雖も苦痛とする処である……講演の打砕かれて通俗的で実世間的でなければならぬことは無論であるが会の態度が今少し謹慎されなくては切角の催しも無効になると思った、」

(都新聞、明治四三年五月九日一〇日号)。

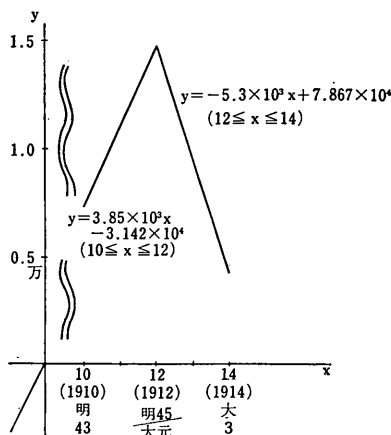
都新聞記者が「実世間的でなければならぬ」とした講演内容については、市教育会も考慮していたところであつたが、細民のための通俗講談会はその他にも細民を対象とする通俗講談会ならではの特徴をもっていた。たとえば、細民居住地帯の衛生状態が悪かったことはここで改めて指摘するまでもないと思うが、その中で最低限の生物的機能を保持して行くにはやはり生活様式の改善が必要であつた。田中武助「子弟の衛生上の注意に就て」(明治四三年六月二六日芝区芝浦小学校での講演、七〇七名)をはじめとする衛生談や、井原正丸「迷信に就て」(同年七月三日本所区三笠小学校での講演、三三七名)、田中武助「台所の話」(大正二年四月二七日芝区芝浦小学校での講演、四八二名)等はいずれもあまりに格差のありすぎた細民居住地帯の生活様式を多少なりとも変革するための刺激を与えようとしたものとみることが出来る。

第4図 細民のための通俗講談会開催回数



ところで、このような細民のための通俗講談会を数量的な面で追跡すれば、開催回数は明治四五年をピークとし、以後放物線を描いて減少して行き(第四図)、内務省の補助金が打ち切られてからの大正三年以降は減衰振動を始めてまさに末期的症状を呈した。⁽⁵³⁾ 明治から大正へ移行行く中での変化は、聴衆動員数の変遷の方によりシャープにあらわれている。第五図にみられる如く、明治期の直線の上昇と大正期のより急速な直線的下降は、下降直線の傾斜が上昇時のそれを上回って急であることからわかるように、細民のための通俗講談会が内務省の施策にもとづく一時的な流行現象であつたことを物語っている。東京市教育会も内務省の補助金を打ち切られてからは一般の通俗講談会の中へ解消し、何ら特別の配慮をして

第5図 細民のための通俗講談会
—聴衆動員状況—



的方面的誘掖を期す」ものであったが、細民のための通俗講談会は「日頃学校にかよって所謂国民教育を受けられざる市民のため」に諸般の修養を期すところに目的があり、そのため大家名士を招聘し、講演を労してそれら「市民諸氏」の社会的向上をはかるものとされていたのである。⁵⁴⁾

三、通俗講談会の衰退

(一) 大正三年以降の変化

大正初期の行政整理により内務省系列の補助金が打ち切られたことは、東京市教育会の通俗講談会にとっては大きな打撃であったが、それは何も財政面ばかりではなかった。従来、内務省の施策に従って重点的に取りあげて来た細民のための通俗講談会が相対的に軽くみられるようになったことは、市教育会をして通俗講談会開催の方向を見失なわせる結果を招いたのである。確かに内務省のてこ入れは細民教化のためであったが、その影響は他方面にも及び、最盛期の通俗講談会は努めて庶民の日常生活に近いレベルでの教化を行なおうとしていた。しかし、内務省系列の講師陣の引き揚げは通俗講談会を再び市教育会幹部中心の講師陣構成にしてしまい、内容面でも国家レベルの問題や国際レベルの問題を庶民の日常生活のレベルに引き寄せずに、そのまま講演内容としてもち出さずさをもたらししてしまった。それには大正三年（一九一一年）に第

いないところを見ると、やはりその関心も一時的なものでしかなかったように思われる。講演内容からみても、大正三年以降、内務省派遣の講師陣が引き揚げてからは、特にきわだった傾向はみられなくなっている。それ以前にあつては、東京市教育会幹部も山の手での通俗講談会は国家的レベルで問題をとらえ、特に精神面での国民的統一をはかりつつ時代の変化に適應する道を開くためのものとみなしていたが、細民居住地帯で行なわれる通俗講談会は明らかに学校教育の補足的な機会とみなしていた。山の手での通俗講談会は「世界文明国の班に列し、転々古今の盛観を極むるに至った」日本にあつても、時代は推移し、物質的、精神的に国民を開拓する必要があるところから、「精神

一次大戦が勃発したという事情もからんでいよう。しかし、それ以上に、市教育会自体がもはや通俗講談会にあまり熱意を示さなくなったことが硬直さをもたらした大きな原因であったように思われる。

それまでの講演内容は、教育会の恣意が働いていたとはいえ、主なものは速記として教育会会誌に掲載されていた。だが、大正三年頃からはそれも姿を消している。それは、一つには通俗講談会の講師陣が固定化し、特定人物の同一講演を各地域へ持ち回ることが多くなったせいでもあった。たとえば、大正四年度は、多彩な話題をもつ加藤咄堂の再起用を別とすれば、市教育会幹部の講演や、東京高等師範学校教授佐々木吉三郎の家庭教育論の持ち回りが大勢を占め、大正五年度には、秋保安治の日米工業界の比較による技術論が、また大正六年度は志賀重昂の欧州大戦論が多く用いられるようになってしまったのである。また補助金が打ち切られた後の予算面をみても、大正四年は六七五円、大正五年は六七二円を計上したが、大正六年には予算五七二円、決算四三〇円余で実質的な講談会の縮少が行なわれていた。⁵⁵⁾大正四、五年度はそれでも教育会予算のほぼ一割を占めていたが、明治末から大正二、三年頃までのそれとは比すべくもなく、通俗講談会への熱意が急速にさめて行くのはおおいにすべくもなかった。

講演内容の面からみると、この頃には一般の通俗講談会と細民のための通俗講談会の間にはすでに差がなくなっていたといえる。特に目につくのは、従来、細民居住地帯ではほとんど行なわれたことのなかった抽象的な天皇制論が下層にまでおろされて行ったことである。加藤咄堂「君と民と国」(大正四年一〇月二七日深川区猿江小学校での講演、六三八名)、教育会理事守屋某「御即位勅語に就きて」(同年十一月二二日本所橋三笠小学校での講演、三五二名)のような講演は、一般の通俗講談会でのそれ——たとえば加藤咄堂「皇室中心思想」(同年一〇月二九日麹町区麹町小学校での講演、三五七名)、同「御即位勅語と国民の覚悟」(大正五年二月九日本郷区湯島小学校での講演、三一五名)——と何らかわりはなかった。

本来ならば、大正三年以降といえども東京市教育会「通俗講談会に関する規定」により、特殊小学校で行なわれる細民のための通俗講談会は一般市民に対する通俗講談会とは別に特別の配慮がなされなければならなかった。「通俗講談会に関する規定」には次のように定められている。

通俗講談会に関する規定

第一条、本会は左の事項に基き講談、講習、音楽、幻燈、活動写真等を通俗的に行なふものとす

東京市教育会主催「通俗講談会」の展開過程

一、国民教育に関する事項

一、市民心得に関する事項

一、日常須知の知識技能に関する事項

第二条、前条の事務を左の三種に分つ、

第一種、一般市民に対する講談講習等の事務、

第二種、特殊小学校の児童保護者等に対する講談等の事務、

第三種、学徒、丁稚、職工、徒弟等に対する講談等の事務、

この規定に定められている第三種は、もともと年に一、二回しか開催されないのであったが、第二種については文部省への報告の中でも

「教育浅き細民に対しては特に力を注げり、且其の講師を囑託し講演の内容を選択するや主として参会すべき聴衆者の種類と社会の状況とを考察し最も適切にして最も有効ならんことを期せり」⁵⁷⁾

としており、内務省系列の講師陣引き揚げ後も何らかの配慮がなされて然るべき性格のものであったのである。

だが、東京市教育会の熱意がさめ、力を抜き始めたことにより、通俗講談会は衰退の一途をたどることになった。大正五年は、四月二九日芝区愛宕高等学校での講談会（陸軍砲兵中佐金子直「最近に於ける欧州戦争に就きて」、北島多一「狂犬病の話」、巖谷千波「新領土の少年」、六〇一名）、五月二日深川区猿江小学校での講談会（貴族院議員江原素六「質朴なる労働者」、細川風谷「正直久助」、五九七名）、六月一日浅草区王姫小学校での講談会（生江孝之「至誠と努力」、細川風谷「誉の夫婦」、六五七名）のように、多くの聴衆を集めるものがある反面、六月三日麻布区絶江小学校での講談会（秋保安治「技術と発明」、細川風谷「宮本武蔵」、一五六名）、十一月二五日京橋区南横町小学校での講談会（志賀重昂「欧州戦争の近況」、細川風谷「板倉勝重」、二四四名）のように、あまり聴衆を動員出来ないものも現われるという、聴衆数増減のふれがはげしい振動現象がみえ始めた。

さらに、大正五年はまた、余興も講談だけとなり、それも細川風谷が受け持つだけとなった。大正六年五月には明治末より大正初期の教育講談を一手に引き受けた感のあった早川貞水が死んでいるから、大正五年にはおそらくかれの出演が無理だったのであろう。貞水は四代目真竜斎貞水だが、早川姓を名乗っていたのは講談組合を脱退していたからである。⁵⁸⁾ かれは相撲を好み、力士伝を得意としていたが、後になって、

「前内務大臣平田東助閣下及前文部大臣小松原英太郎閣下より貞水は教育講談に依りて国家に力を尽せよとの御用命を受けたこともございます」⁵⁹⁾

と述懐しているように、内務省の囑託となり地方を巡回するようになった。そのため貞水は御用講談師と呼ばれ、その名をあまねく知られるようになったのである。東京における通俗講談会に出演する場合も、あらかじめ知事の検閲を受けた講談を演じていたとみずから述べているが、⁶⁰⁾明治末Ⅱ大正初期はかれのような御用講談師による教育講談が最も盛んな時であった。かれの死後、大正六年九月には五代目貞水が登場するが、それもごくわずかの期間であり、大正七年の中頃からは余興そのものがほとんど行なわれなくなってしまっている。大正九年には再び琵琶、尺八等の余興が行なわれたが、それも一時的な現象で余興の時代はもはや終りを告げたといわざるをえない状況であった。

ここで少し余興についてふれておけば、余興が通俗講談会で果してきた役割は、はかり知れないものがあつたといつてよい。一般庶民はパースナル・コミュニケーションにより教化活動についての感想を伝えあうことがあつても、反応を文字で書き残すことはほとんどないから、その効果を直接知るとは今日ではほとんど不可能だが、間接的には聴衆数の増減で反応を推し測ることが出来る。おそらく、通俗講談会の聴衆の中には、知名人や市教育関係者の講演よりも、むしろ余興に関心を示して集まつたものも数多くあつたにちがいない。そこで余興別に聴衆数の増減を調べてみると、第二表にみられるように明らかな差がある。一般の通俗講談会においては、余興が行なわれない場合の一回あたり聴衆数三三七名に対し、活動写真や幻燈の場合は二・五倍以上の八七四名を動員しており、また、講談や義太夫、琵琶、尺八等の余興がある場合と、余興がない場合とを比較してみても一回あたり一〇〇名のひらきがある。このような傾向は、一般の通俗講談会ほどではないにしても、細民のための通俗講談会についてもいえることである。

このように余興を導入し、それにより聴衆を動員することに対し、数多くの通俗道話を書いた安芸愛山はきわめて批判的であつた。愛山によれば、活動写真を上映したり、講談をとり入れたりするのは、結局講談会自体に魅力がないからであつた。余興によつて聴衆を動員する通俗講談会はそれだけですでに失敗である。そこに集まる人々は、

「講演を聴聞せんとして来れるにはあらで活動写真を見物せんが為めに、福引の景品を取らんが為めに、蓄音器を聞かんとして講談を聞かんとして集まれる人々たり、社会改良の講話は只だ御勉めとして暫く耳を貸すまでにて心茲に非ず聞いて聴えざるものあり」⁶¹⁾

といった状態だからである。しかし、たとえ愛山がそう言つても、東京市教育会の通俗講談会はそれと知りつつ、余興に教化的機能認め、積

第2表 余興別にみた通俗講話会の聴衆数（1回平均）
一般の通俗講話会（明40～大10）・かゝこ内は回数

余興なし	講 談	活動写真・幻燈	義太夫・蓄音器 琵琶・尺八など	（大正9年前・大正9以降）
337人 (67)	427 (146)	874 (15)	437 (51)	(476 (26) ・ 380 (25))

細民のための通俗講話会（明43～大10）・かゝこ内は回数

余興なし	講 談	活動写真・幻燈	勅語の明 幻燈説	義太夫・琵琶・尺八
410人 (11)	449 (84)	678 (17)	469 (7)	513 (25)

極的にとり入れていたのであった。平易な内容の講演を行なうことのほかに、娯楽を通じた教化をも行なおうとしたことにこそ、通俗講話会の通俗講話会たるゆえんがあったのである。

ところで、大正六年になると、講話会予算の縮小にともなう通俗講話会の退潮は一層顕著になった。大正六年には二五回の通俗講話会が開かれたのみだが、六月二二日麹町区富士見町小学校での講話会（加藤咄堂「人格の権威」、多田房之輔「短気の善用」、細川風谷「相馬大作」、二七三名）、六月二三日小石川区小日向台町小学校での講話会（佐々木吉三郎「家庭改良談」、多田房之輔「短気の善用」、余興・尺八、二八四名）、六月二七日赤坂区氷川小学校での講話会（実業之日本社々長増田義一「世渡りの幸不幸」、文部省視学委員桜井寅之助「戦時中の欧米視察談」、松山清風「旅行談」、二七四名）の頃から聴衆数は軒並み減少して行った。

さらに、このような傾向に輪をかけ、しかも通俗講話会の方向を大きく変えつつ、その衰退を決定的なものにしたのは、尾崎行雄の東京市教育会々長辞任にともなう医博・男爵高木兼寛の会長就任であった。高木兼寛が教育会々長に就任したのは大正六年一月であったが、その頃から通俗講話会は従来とは全く違った様相を呈するようになるのである。高木は鹿児島藩士の出で、東京海軍病院長、海軍々医総監、貴族院議員、中央衛生会委員、教育調査会委員、生産調査会委員等を歴任し、東京慈恵会病院を設立した人物である。晩年に至り、古典講究会々長として敬神崇祖を唱導するようになつたが、高木の死は太正九年四月二三日であつたから、市教育会々長に就任したのはまさにその晩年であつた。そして、実はその敬神崇祖の強固な信念に加えて、二六新報の記者が「無帽無外套で一生を貫いた一風も二風も変つてゐるので有名な、雷親父であり、頑固親父でもある」と称した頑固さが通俗講話会経営を独善化し、衰退を一層はやめてしまったといえるであらう。

(二) 民力涵養と通俗講話会

高木兼寛は市教育会々長に就任するや、ただちに通俗講話会の講演をみずから出た。かれ自身敬神崇祖の信念をもち、教化に関心を寄

せていたせいもあろうし、その頑固さにもよるであろうが、かれはほとんどの通俗講談会を独占した。大正六年十二月二日神田区一橋高等小
学校での講演を皮切りに、八年四月に至るまで、かれは精力的に市内を巡回したが、テーマは一貫して「市民教育」であった。特に、大正七年
四月から翌八年三月にかけての大正七年度は、合計二二回の通俗講談会のうち、かれの「市民教育」が二〇回を数えている。七月一九日芝区神
明小学校での講演、加藤咄堂「共同生活の基礎」、陸軍中将伊藤瀬平「時局について」、一〇月一九日下谷区御徒町小学校での講演、志賀重昂
「欧州大戦の比較」以外は、すべて高木の「市民教育」であった。しかもかれは余興をきらい、ほとんどの講談会をかれ一人の講演のみで通し
ている。

だが、大正八年四月になると、再び従来のような通俗講談会に戻り、江原素六をはじめとする各界の人材を投入するようになり、高木の独演
会も終りを告げたかにみえた。内容的には、江原素六「節制」（大正八年一〇月一四日日本郷区富士前小学校での講演、約四〇〇名）、同「慢性
的怠業」（同年一〇月二一日日本所区菊川小学校での講演、約六七〇名）、加藤咄堂「思想問題と生活問題」（同年五月三〇日麹町区番町小学校で
の講演、約四二〇名）のようなテーマにもみられる如く、ごく身近かな生活意識のレベルに足を踏み入れながら、また一方で抽象的な思想問題
をも扱うといった傾向を強めていた。そのような中で、同年一〇月二五日麻布区飯倉小学校で開かれた通俗講談会では、法学博士堀江帰一「日
米現時の労働問題」といった講演まで行なわれ（聴衆三九〇名）、堀江をして、

「自分は従来各地の教育会主催の会合にて講演を依頼されたが、教育会などは此種の問題は一般に危険視されたのである。今日は言論の自由もあって此会に
此問題を論ずるのは愉快である」⁶⁴

とまでいわしめている。まさに大正デモクラシーの風潮がもたらした産物であった。

ところが大正八年一月になると、高木兼寛が再び登場し、今度は「民力涵養」のテーマで市内を巡回講演し始めた。それは、時あたかも第
一次大戦終了後のデモクラシーの高まりを内務省系列の教化活動が防ごうとしていた最中の出来事であった。そして、実は高木が民力涵養問題
をとりあげたのも、大正八年三月、内務大臣が地方長官あては「戦後民力涵養ニ関スル五大要綱」という訓令を発したことに由来していたので
ある。内務省はその普及、宣伝のために各府県に囑託をおき、互に連絡をとりながら国民各層への浸透をはかって行った。⁶⁵

「此の民力涵養の宣伝は講師の雄弁と官庁の力と相俟って各地共盛会を呈し、到る処に於て実行要目の決議宣言を為しました。宣伝運動としては成功したも

のと言はねばならぬ。然るに其の趣旨実行の決議宣言が三年後の今日に果して幾千実行せられてるか、誠に心細い感がないでもない」といわれるように、それがどれだけの効果をもっていたか疑問であるが、高木の「民力涵養」はまさにそのような内務省系列の宣伝、教化活動の一翼をになうものだったのである。加藤咄堂、留岡幸助等はこの時の内務省囑託講師であった。⁽⁶⁷⁾

民力涵養に関する五大要綱とは、

- 一、立国ノ大義ヲ闡明シ国体の精華ヲ発揚シテ健全ナル国家観念ヲ養成スルコト
- 一、立憲ノ思想ヲ明瞭ニシ自治ノ觀念ヲ陶冶シテ公共心ヲ涵養シ犠牲ノ精神ヲ旺盛ナラシムルコト
- 一、世界ノ大勢ニ順応シテ銳意日新ノ修養ヲ積マシムルコト、
- 一、相互諍和シテ彼此共済ノ実ヲ挙ゲシメ以テ輕進妄作ノ憾ナカラシムルコト
- 一、勤儉力行ノ美風ヲ作興シ生産ノ資金ヲ増殖シテ生活ノ安定ヲ期セシムルコト⁽⁶⁸⁾

の五項目であり、これにはさらに内務省案として「民力涵養運動の実行要目」が付せられていた。その主なものをあげると、

第一

- イ、国民教化ノ普及徹底ヲ期スルコト、
- ロ、祖先崇敬ノ実ヲ挙グルコト
- ハ、教育、思想、道德、宗教ニ関スル諸家及諸団体ノ意思ノ疎通ヲ図リ、其ノ奮起ヲ促スコト

第二

- イ、公德心、公共心ノ養成ニ努ムルコト、
- ロ、共同作業ノ奨励ヲナスコト
- ハ、奉公感謝ノ觀念ヲ旺盛ナラシムルコト
- ニ、自治制ノ要義ヲ了得セシメ、其ノ実績ヲ挙グルニ努ムルコト

中 略

第五

- イ、勤勞ノ趣味ヲ助長スル方法ヲ講ズルコト
- ロ、貯蓄ノ奨励ニ努ムルコト

ハ、時間ヲ確守スル方法ヲ講ズルコト

ニ、能率増進ノ方法ヲ講ズルコト

ホ、衣食住ノ改良ヲ計リ、簡易生活ヲ奨ムルコト

ヘ、冠婚葬祭送迎ノ弊害アルモノハ之レヲ改良スルコト

ト、娯楽改良ノ途ヲ講ズルコト⁽⁶⁹⁾

等であり、祖先崇敬のように高木兼寛の信念に合致するものが多く、また、公共心の養成、犠牲的精神の育成、勤儉の生活様式の普及徹底等は、従来、東京市教育会が主催してきた通俗講談会のねらいと同質のものであった。

大正七年以降の通俗講談会は、すでに末期的症状を呈し、運営方針が次々とかわっていったが、結局はかかる内務省系列に収斂したところに、この通俗講談会の基本的性格を見い出すことが出来るといえるかも知れない。ところが、この方向がようやく確立したかにみえた矢先、高木兼寛の死が報ぜられた。高木の死は大正九年四月で、かれが「民力涵養」を持ち回ったのは大正八年一月一五日京橋区文海小学校での講演（聴衆約一八〇名）から翌九年三月一八日本所区本横小学校での講演（聴衆約一〇〇名）に至る半年であった。大正の中期ともなれば、活動写真の普及や大衆雑誌の氾濫等にもみられるように、すでにマス・メディアの時代に入り、講演会形式のコミュニケーション全盛の時代は過ぎさりつつあった。そこへ高木の独善的運営が加わっては、通俗講談会の人気凋落もやむをえなかったといえる。日常生活に何の利益をもたらず、余興さえも行なわれないとあれば、一般庶民が離れて行くのも無理はなかったが、おそらく、内務省にしてみても、講演回数が年間二十数回では通俗講談会に対する評価は低かったものと思われる。各地で行なわれた民力涵養講演会について内務省が改善事項として指摘した中で、東京市の場合は、

「多数聴衆を集むる為並直観的に趣旨を理解せしむるが為普通の講演の外活動写真を利用するを最も良好と認む」

「講演の中には特に地方の特種⁽⁷⁰⁾の事情を斟酌し之に適合するの演述を為すことは単なる抽象的に理論の演述よりも一層聴者の判断を適確にし並に聴衆の興味を唆るの利あり」

という指摘がなされていた。

高木兼寛の死後、通俗講談会はしばらく再開の見通しも立たなかったが、九月に入りようやく再開されるに至った。生江孝之「独立自営の精

神」(大正九年九月二一日深川区霊岸小学校での講演、約三七〇名)、安井哲子「世渡りの道」(同年九月二七日本所区江東小学校での講演、約五〇〇名)に始まり、余興には琵琶がとり入れられるようになった。この頃特に目立ったのは、婦人層への働きかけである。大正九年九月から大正一〇年三月にかけて行なわれた通俗講演会二二回のうち、婦人のみを対象とするものは一〇回を数えた。甫守ふみ子「現代婦人の務」(大正九年九月二九日下谷区竜泉小学校での講演、女三五〇名)、吉岡弥生「母の為め」(同年一〇一五日神田区神竜小学校での講演、女一八〇名)、鳩山春子「現代社会に処する婦人の責任」(同年十一月二二日牛込区市谷小学校での講演、女四〇〇名、ほか二回)等はいずれもそうである。

大正一〇年度になると、大森洪太「借地借家法ニ就キテ」(大正一〇年六月一四日本所区高小での講演、約五三〇名、ほか三回)のような講演も行なわれたが、あとは棚橋源太郎「生活改善ト教育」(同年七月一八日小石川区墨田小学校での講演、約三三〇名)、今井兼寛「生活改善ノ第一義」(同年十一月二二日下谷区万年小学校での講演、約三〇〇名)、藤井利誉「家庭教育ニ就キテ」(同年九月二二日本郷区駒本小学校での講演、約三六〇名)、浅山尚「子孫ニ何ヲ譲ルヘキカ」(同年九月十七日牛込区余丁町小学校での講演、約四五〇名)等にもみられるように、教育色が一段と強くなり、もはやかつてのような通俗講演会の時代は完全に過ぎ去った感を与えた。事実、文部省が通俗教育の名称を捨て、正式に「社会教育」の呼び名を採用したのは大正一〇年であり、また、東京市に「社会教育」課が出来たのも、同じく大正一〇年だったのである。⁽⁷¹⁾

註

(1) 「教化」という語が江戸時代後半以降もっぱら道徳的な面での意識変革をめざす活動をさすようになったことについては、文部省「江戸時代末期に於ける教化の觀念と其の理念」(文部省社会教育叢書第三四輯) 昭一一、を参照。

(2) 日出新聞社編「大東京自治半世紀」 昭一四、七三頁

(3) 「東京市教育時報」 第一号、明治三三年一〇月、三三頁。

(4) 同 三四頁。

(5) 東京市教育会が設立されると、府と市に分かれた教育会活動は重複するところが多くなった。そこで合併を唱えるものもあったが、両教育会の創立動機の違いやさまざまな事情でうまく行かず、結局大正一五年に至ってようやく統一された。それが帝都教育会である。なお、この間の事情に關して

は、東京都教育会編「東京都教育会六十年史」 昭一九、東京府「東京府史」行政篇第五卷、昭一二、を参照。

(6) 深川区にはかつて教育会があったが解散し、明治三五年に再度設立されたと記録されている。その後も本所(明治三七年)、四谷(明治三八年)、小石川(明治三八年)に設立され、明治四〇年以前にはほとんどの区が出揃った(「都市教育」 第一三〇号、大正四年七月、一〇一〜一一〇頁参照。神田区の設立年度については「神田区史」(昭二)によった。なお、赤坂区教育会は「赤坂区史」(昭一六)によると大正五年の創立である。)東京市教育界が設立されるや、下谷、浅草、日本橋等の区教育会は市教育会の支部となったが、後に述べる、明治三七年の市教育会の危機に際し、市から離れて再びもとの区教育会にもどっている。

(7) 東京都教育会「東京都教育会六十年史」 昭一九、一二頁。

- (8) 「都市教育」第一三〇号、大正四年七月、七頁。
 なお、浅草区の場合については日出新聞社編「前掲書、三九九頁、参照」。
- (9) 「東京市教育時報」第一号、明治三十三年一〇月、三三頁。
 同、四六頁。
- (10) 同、四七頁。
- (11) 同、四七頁。
- (12) 同誌、第六号、明治三十四年三月、八一頁。
- (13) 同、一頁。
- (14) 同。
- (15) 同。
- (16) 同誌、第七号、明治三十四年四月。
- (17) 同誌、第八号、明治三十四年五月、一二頁。
- (18) 同誌、第九号、明治三十四年六月。
- (19) 同誌、第三二号、明治三十六年五月。
- (20) 同誌、第三七号、明治三十六年一〇月。
- (21) 日出新聞社編「前掲書、九八頁」。
- (22) 「東京市教育会雑誌」第一号、明治三十七年九月、三頁。なお、三十七年中に行なわれた講談会は三十六年度予算の範囲で行なわれた一月から三月にかけての四回があるほかは、一月二三日神田区錦輝館で行なわれた通俗講談会一回しか記録されていない。
- (23) 同誌、第一〇号、明治三十八年六月。
- (24) 同。
- (25) 文部省普通学務局「地方通俗教育施設状況」大五、一頁。
- (26) 明治三十九年九月二九日牛込区市ヶ谷小での講談会の冒頭のあいさつについて、「戸野幹事戦後市民教育の発展に向けて社会教育上通俗講談会の切要なることを文明都市の実例に照らして詳述」
 との記事がある。「東京市教育会雑誌」第二六号、明治三十九年一〇月、六三頁。
- (27) 同誌、第二四号、明治三十九年八月、四九頁。
- (28) 同誌、第一六号、明治三十八年一二月。

東京市教育会主催「通俗講談会」の展開過程

- (29) 同誌、第二四号、明治三十九年八月。
- (30) 同誌、第四四号、明治四十一年五月一頁。
- (31) 同号参照。
- (32) 同誌、第四七号、明治四十一年八月、五六頁。
- (33) 同誌、第五八号、明治四十二年七月、五一頁。
- (34) 同誌、第七〇号、明治四十四年七月、五五・五六頁。
- (35) 同誌、第六八号、明治四十四年五月、五一頁。
- (36) 巖谷小波「通俗教育調査会の事業」〔雄弁〕第二卷第一〇号、明治四十四年一〇月号、四八・四九頁。
- (37) 東京市教育会編「前掲書、四一九・四二〇頁」。
- (38) 田川大吉郎「回顧十五年」〔都市教育〕第一三〇号、大正四年七月、六四・六五頁。
- (39) 余興に活動写真がとり入れられたのは、記録でみる限り、明治四十四年九月五日下午区御徒町小での婦人のための通俗講談会が最初である。その時は講演二題の他にエムバレー商会の活動写真数種が行なわれ、六二八名の聴衆があつたとされている〔都市教育〕第八五号、明治四十四年一〇月。
- (40) 「都市教育」第八七号、明治四十四年一二月、四四頁。
- (41) 第一回は聴衆動員数を「東京市教育会雑誌」、「都市教育」の記録より抽出し、その傾向を近似的に表現したグラフである。ここでは聴衆動員数のデータそのものがどれほど正確であるか疑問なので、だいたいの傾向をとらえるために最小二乗法による近似的な函数表現を採用した。
- (42) 「都市教育」第一三一号、大正四年八月、二六頁。
- (43) 東京都教育会編「前掲書、四一四頁」。
- (44) 同、四一五頁。
- (45) 井上友一「地方自治の訓練」〔第二回第三回地方改良講演集〕下、一一〇・一一一頁。
- (46) 東京府編「東京府管内感化救済事業一斑」大二、三頁。
- (47) 「風俗画報」第三八〇号、明治四十一年二月、四頁。
- (48) 添田知道「小説教育者——坂本龍之輔の生涯」東都書房版、五一四頁。

(49) 「風俗画報」第三八〇号、五頁。なお、添田知道の前掲書六三七頁には坂本龍之輔調べとして万年小の父兄の職業が掲載されている。参考までに示すと、

人力車夫七三名。

小商人四一名。(屑買、玩具製造兼小売、行商等)

紙屑買一八名。

内職業者二一名。

荷車挽一七名。

日雇人足一三名。

職人一七名。

その他二一名。

計二二一名。

ただし、これは本人の申し出通りなのでいく分事実との相違があるかも知れないとのただし書きがつけられている。

(50) 「風俗画報」第二七七号、二六頁。

(51) 「東京市教育会雑誌」第六九号、明治四三年六月、六一頁。

(52) 同誌、第六八号、明治四三年五月、五一―五二頁。

(53) 補助金が打ち切られてからも細民居住地帯での通俗講談会は開かれており、それらを追跡すると sin. カーウと cosin. カーウを合成し、しかも次第にその振幅が小さくなる減衰振動を示す(図は省略)。

(54) 「東京市教育会雑誌」第八一号、明治四四年六月、六三頁。

(55) 「都市教育」第一六六号、大正七年七月、二〇頁。

(56) 文部省普通学務局「地方通俗教育施設状況」大五、一六―一七頁。

(57) 同、三四―三五頁。

(58) 佐野孝「講談五百年」昭一八、一五三頁。

(59) 早川貞水「教育講談」第一輯、大八、

(60) 早川貞水「創立当時を思ひ浮べて」(「通俗教育」第三三号、大正二年一月号、七頁)。

(61) 安芸愛山「通俗教育道話」大三、(大正八年第一六版)、緒言二頁。

(62) 「都市教育」第一八七号、大正九年四月、一頁および別紙。

(63) 中村舜二「吞牛撲稿」昭三六、六八頁。

(64) 「都市教育」第一八三号、大正八年十二月、七頁。

(65) 松村松盛「民衆の教化」大一一、二八七頁。

(66) 同、二九〇頁。

(67) 内務省地方局「民力涵養宣伝経過」大九、六頁。

(68) 同、一頁。

(69) 同、三―五頁。

(70) 内務省社会局「民力涵養実行資料(其四)——講演会の開催に付改善を要すべき事項——」大二〇、一頁。

(71) 東京市社会局「東京市社会局年報」第五回(大正一三年度)、大一一、一三九頁。